

# 学会ニュース

## 目次

・ 退任にあたって 佐々木健一	.....	1
・ ドイツにおける図書館および電子学術情報の利用について	田中 均	..... 3
・ 事務局より	.....	6

## 退任にあたって

佐々木健一

諸般の事情から、1期のみ代表幹事の大役をお引き受けし、その2年間はあっという間に過ぎた。その間、何をしたのか。大したことができなかつたことは間違いない（その必要もなかつた、と言うべきかもしれない。学会は既に軌道に乗って久しい）。

当初、幹事の定数の規定がきつく、日常の業務をこなすうえで必要な人員を確保できなかったのも、応援団と名前をつけて、何人かの方々にお手伝い頂いた。こう書くと、いわゆる「手足」を想像されるかもしれないが、なかには音楽の礒山さんのような「大物」も含まれている。それは、幹事会のたびにどなたかに、研究の一端を披露して頂こうと考えたからである。幹事会のメンバーも、応援団の方々も、学会運営への奉仕の一種の見返りとして、学問的な知見を広げ、新しい友情を結ぶことができるなら、それは素晴らしいことと思われた。結局2-3度しか、このかたちでの幹事会を開くことなく終わってしまったから、この案も十分に成果を挙げたとは言えない。その他にわたくしが多少とも積極的に関わったのは、規約の文言の整理位である。その他、ニュースレターの刷新と名簿の整理は小田部（新代表）幹事によるものだし、年報の編集は安西幹事に多くをおんぶした。日常的な業務では、馬場応援団員（？）（現幹事）を煩わせた。これらを銘記したうえで、幹事と応援団の方々全員に慰労の言葉を贈り、感謝の気持ちを捧げたい。

これで既に、小文においてわたくしの為すべきことは尽きているかもしれない。しかし、これでは恐らく、用意されている紙幅を満たすにはほど遠いであろう。そこで、18世紀研究の意義に関する愚見の一端を記して、責めをふさぎたいと思う。

わたくしにとって忘れがたい大会は幾つかある。初めて研究発表の機会を得た名古屋の大会、土地の魅力の加わった竹田や松江の大会など…… 本年の大会も、当然そのひとつになる。当番校を引受け、自ら《近代都市の胎動》という共通論題をコーディネートさせて頂いたからである。その懇親会の折に、スピーチをせよとの突然の指名をうけて、紹介してしまったことなので、そこにおられた方々には、またか、との思いをもたれるであろうが、お赦し頂こう。おそらく1963年に、東大文学部でディドロの『ラモーの甥』を講読された平岡昇先生の、18世紀研究の（当時における）現状についての弁である。フランス文学において18世紀の研究を志すひとは、ルソー研究を除けばごく稀だ、という趣旨だった（異端的なケースとして渋沢龍彦のサド研究を挙げ、「渋沢君」とおっしゃ

ったのが、意外の感とともに記憶に残っている)。先生は、17世紀の研究にはかなりの(あるいはそこそこの数の)研究者がいることを挙げて、それとの比較で18世紀研究の低調を語られたように思う。いまわたくしが思うのは、その状況はほぼ逆転した観がある、ということである。

この状況の逆転には、われわれの生きている歴史的な現実根ざした理由があるはずである—もちろん、わたくしの話は乱暴だが、牽強付会であるのを承知のこととして、御容赦頂ければ嬉しい。ポイントは3つある。まず、現代が《近代の終わり》であるということ、第2には18世紀が真の意味で(特に17世紀に対して)近代的な思潮の時代であること、そして第3にはその18世紀と現代との関係、すなわちわれわれの研究のスタンスである。

《近代の終わり》については、もはや議論は終わってしまっていて、ことさら論ずるのも気がひけるほどである(ただし、いわゆるポストモダンが近代の終わりではない。私見では、これを混同する議論は根本的に間違っている)。分野によって、事情は大いに異なるはずである。藝術史は相当にこれが顕著な領域だが(指導理念としての創造性を示す新しいスタイルが出来にくくなっている。ただし、ここでは、近代の終わりはポストモダンと符合する)、政治や経済については異論がありうる。「共産圏」の崩壊がこのポストモダンの動向の仕上げをしたことは間違いなさそうだが、勝利したとされる民主主義的資本主義は、根本において近代の理念なのではないか。また、地域によっても、事情は異なるのではないか。日本や中国において、また低開発国において、《近代》は本当に終わった、もしくは終わりつつある、と言えるのか。このような疑問にも拘わらず、一般的に《近代の終わり》が語りうるとすれば、それはグローバルな方向性としての《西洋近代》が、その自明性を喪いつつある、ということではなからうか。

これらの問題を考えることは、必ずや、《近代》とは何なのか、という問いを惹起する。その概念次第で、近代は《終わって》いたり、いなかたりする、という違いが生まれてくるだろう。この問題は、自ずから第2の問題、17世紀に対して18世紀の方が「真の意味で」近代的、という場合の「真の意味」とは何か、ということに直結する。この2つの世紀を対比するに際しては様々な観点がありえようが、哲学が基本的な世界観の違いを浮き彫りにしてくれる。デカルトから、パスカル、マルブランシュを経て、スピノザ、ライプニッツに至るのは形而上学の系譜である。形而上学は、われわれの経験する現象を基礎づけ、説明し、合理化するために、現象を超脱して一般的な原理を立てようとする。これに対して、18世紀は経験論と感覚論の時代であり、経験の現象を現象の内部で説明し、この経験される世界の仕組みを解析しようとする。わたくしにとって近代とは、純粋に人間的な(言い換えれば神のような超越的原理抜きの)、或いは人間中心的な文明の時代である。17世紀的な形而上学は、旧世界に対して向けられた疑いに対して、伝統的な思想的武器で立ち向かったもので、新しい世界の原理が定着したのが18世紀の「哲学」だ、と見ることができよう。快樂に対して融和的な思想傾向が、近代世界を特徴づけている。

わたくしが学生だったころ、永遠なるもの、普遍的なものを西洋文化のなかに探るような態度が、多くのひとを支配していたように思う。その観点から見れば、18世紀の文化は墮落以外の何ものでもなかった。その後の「繁栄」の世相を経て、いまわれわれは、生活感覚のレベルで、18世紀の此岸的な文化に親近感を覚えている。この親近感が18世紀研究を支えている面のあることは間違いない。しかし、《近代》を主題的に考えようとするとき、その原点としてこの世紀に学ぶことは当然である。それを武器に現代を批判しようとするにせよ、逆に文明批判の標的をこの原点に求めるにせよ。

かくして18世紀研究は……などと締めくくろうとすると、嘘っぽくなる。40年前の平岡先生の述懐と、その後の状況の変化にふれて、下手な思索を巡らしてみただけである。わたくしが望んで共通論題の主題に取り上げていただいた都市についても、この視野のなかに捉えることができるはずである。城壁に囲まれて自然から文明と文化を隔離していた伝統的な都市は、城壁をもたない近代型へと変化してゆく(そのさきがけは17世紀末のパリだった)。このことの意味を立論するには、もう少し時間を頂きたい。

# ドイツにおける図書館および電子学術情報の利用について

田中 均（日本学術振興会特別研究員／神戸大学・ポツダム大学）

はじめに

筆者は2005年5月から、約一年間の予定でドイツ・ポツダム大学に研究滞在しており、この度18世紀学会事務局から、ドイツの図書館の利用情報、ドイツでの電子媒体および電子情報などの実情や、インターネットでの書籍購入などについて、学会ニュースにおいて報告する機会を与えて頂いた。ただし、この報告をまとめている時点で筆者はまだ当地に三ヶ月弱しか滞在していないので、この報告が詳細かつ網羅的なものとはなり得ないことをご了解頂きたい。筆者がドイツで学術情報を求めて試行錯誤する過程の中間報告として本稿を読んで頂ければ幸いである。また筆者の専門分野の関係上、紹介する情報が哲学・文学に関するものに偏っていることについてもあらかじめお断りしておく。

## 1. 図書館

### 1-1. ベルリン国立図書館

「ドイツの図書館一般」の利用について報告することは筆者には無理なことであるから、ここでは筆者が現在主に利用しているベルリン国立図書館（Staatsbibliothek zu Berlin 以下SBBと略す）に限定してその利用方法について報告する。

SBBでは9月1日から利用規則が大幅に変更される。その理由としてSBBが挙げているのは、オンラインの蔵書目録および貸出システムの導入に伴って蔵書の貸出が急激に増加し、予算・人員の面で対応が困難になったということである（1999年には一日平均1200冊が貸し出されていたのが、2004年には3500冊に増加したと指摘されている）。

大きな変更点の一つは、図書館利用証の値上げと一日利用券の廃止である。これまでSBBには、開架されている参考図書の閲覧のみが許可される一日利用券（0.5ユーロ）と、書庫収蔵図書の館内閲覧・館外貸し出しも可能になる一週間利用証（2.5ユーロ）・年間利用証（15ユーロ）とがあるが、9月からは月間利用証（10ユーロ）と年間利用証（25ユーロ）の二本立てとなる。一日利用券は他の利用証とは異なり、特に本人証明の書類がなくても自動販売機で購入できるものだったが、図書館の蔵書を保護するために今回廃止されることになった。

一日利用券の廃止により、SBBを利用するには必ず利用証作成の申込をしなければならなくなる。EU加盟国以外の国籍の外国人が利用証を作成するには、パスポート・居住証明書・最低三ヶ月以上の有効期間が残っている滞在許可証を提示することが必要となる。

利用証を作成した後であるが、SBBでは参考図書以外の図書は閉架式の書庫に収蔵されているので、図書を閲覧・貸借するためにはオンラインで請求する（bestellen）必要がある。既に貸出中の図書についても同様にして予約する（vormerken）ことになるわけだが、今年9月からは新たに、予約一件ごとに1ユーロの料金が生じる。現行のオンライン予約システムの導入後、予約件数が顕著に増大したことがSBBにとって負担になっており（1999年の34852件に対して2004年の187685件）、にもかかわらず予約された図書の大半が結局借り出されないということを踏まえて、安易に予約を入れることを防ぐ「教育効果」をねらって今回予約の有料化に踏み切ったとのことである。

以上のような値上げ・有料化の一方、これまで郵便で行っていた利用者への通知を電子メールに切り替えるなど、サービスの改善も予定されている。

その他SBBの利用方法について詳しくは、以下のサイトを参照されたい。

<http://staatsbibliothek-berlin.de/>

### 1-2. 図書館関係のデータベース・リンク集

以下では、SBBをはじめドイツの図書館に関係する主要なデータベース、リンク集を挙げておく。

SBBの蔵書目録

<http://www.stabikat.de/>

ベルリン、ブランデンブルク両州の図書館が加盟するKOBV (Kooperativer Bibliotheks-verbund Berlin-Brandenburg)の蔵書目録 (ドイツの他地域や欧米各国の国立図書館の蔵書目録も横断検索することができる)

<http://digibib.kobv.de/>

ハンブルク、ベルリンなどの図書館が加盟するGBV (Gemeinsamer Bibliotheksverbund)の蔵書目録

<http://www.gbv.de/>

IBZ (Internationale Bibliographie der geistes- und sozialwissenschaftlichen Zeitschriftenliteratur)

1983年以降の人文・社会科学分野の雑誌記事が検索できる

<http://www.gbv.de:80/gsomenu/opendb.php?db=2.4&ln=de>

ZDB (Zeitschriftendatenbank)

冊子体雑誌およびE-ジャーナルの、ドイツ全体の所蔵目録

<http://zdb-opac.de/>

EZB (Elektronische Zeitschriftenbibliothek)

レーゲンスブルク大学によって開発されたこの「E-ジャーナル図書館」では、E-ジャーナルへのリンクが分野ごとに整理されている。個々の大学・研究機関ごとにライセンスを取得する仕組みのため、ドイツのどの大学・研究機関からアクセスするかによって、閲覧できるE-ジャーナルの種類が異なるという特徴がある。

<http://rzblx1.uni-regensburg.de/ezeit/>

ELSTER (Elektronischer Startpunkt Erstinformation)

SBBのサイトにある、学術情報のリンク集。

<http://elster.staatsbibliothek-berlin.de/>

## 2. CD-ROMなど

### 2-1. Digitale Bibliothek

ドイツ語圏の文学・思想史の研究者で、Directmedia社のDigitale BibliothekシリーズのCD-ROMのお世話になったことのある人は多いのではないだろうか。

筆者はこれまでシラーとフリードリヒ・シュレーゲルの美学理論を研究してきたので、とりわけ「レッシングからカフカまでのドイツ文学」をよく利用しており、非常に重宝している。ただしテキストに間違いが散見されるのは残念である (筆者がこのCD-ROMを購入した後に増補版が出たようだが、テキストの間違いも訂正されたかどうか確認していない)。このシリーズでは他にも多種多様なCD-ROMが出版されており、18世紀研究に関わるものだけでも、ゲーテ、レッシング、シラーの著作集、「プラトンからニーチェまでの哲学」、「ハンス・ザックスからアルトウール・シュニッツラーまでのドイツ語戯曲」、「ルターからリルケまでのドイツ語叙情詩」、「女性のドイツ文学」、独文科学生のための原典集 (古典主義とロマン主義の二巻)、さらにズルツァーの”Allgemeine Theorie der schönen Künste”などがある。

<http://www.digitale-bibliothek.de/>

### 2-2. Literatur im Kontext

InfoSoftware社のLiteratur im Kontextのシリーズでは、ライブニッツ、カント、ゲーテ、フィヒテなどの著作集がCD-ROMとして出版されている。

<http://www.infosoftware.de/>

#### 2-3. Digitale Bibliothek Deutscher Klassiker

Deutscher Klassiker Verlagから出版されているBibliothek Deutscher Klassikerのシリーズは、CD-ROM版およびウェブ版でも発売されている（サイトを見た限りでは、個人向けというよりむしろ図書館向けの商品である印象を受けた）。

<http://klassiker.chadwyck.com/> Chadwyck社は、ゲーテ著作集（Weimarer Ausgabe）、シラー著作集（Nationalausgabe）も取り扱っている。

#### 2-4. Kindlers Neues Literaturlexikon

ドイツ語圏の作家について研究を始めるときに便利なのがこの文学事典であるが、これもCD-ROMになっている。

<http://www.systema.de/>

#### 2-5. Duden, Brockhaus

今年8月1日からは、ドイツ16州のうち14州で学校教育および公的文書について新正書法が義務づけられることになったが、ドイツにおける正書法改革の行方は未だ混沌としているようである。とはいえ、ドイツ語で論文や公的文書を書く機会がある研究者が新正書法に無関心でいる訳にはいかないだろう。

ドイツ語正書法辞典と言えばDuden社のものが代表的だが、出版125周年を記念して、8月1日から記念価格で販売されている（冊子体、CD-ROM、CD-ROMと冊子のセットの三種類についてそれぞれ特別価格が設定されている）。

またDuden社からは、綴りと文法をチェックする校正ソフトとして、Duden Korrektor PLUS 3.0も発売されている。筆者は以前からドイツ語で文章を書く際に綴りや文法を度々間違えており、内心忸怩たるものがあったので、最近このソフトを購入し、現在は使い勝手を確かめている最中である（もしも購入される場合には、ご自分のコンピューターのOSおよびワープロソフト等がこの校正ソフトに対応しているかあらかじめご確認頂きたい）。

<http://www.duden.de/>

また、Brockhaus社からはDVDのマルチメディア百科事典が出版されている。

<http://www.brockhaus.de/>

以上挙げたCD-ROMのうち、筆者が実際に購入したもの以外の多くをSBBの端末で閲覧することができた。

その他にも、例えばWissenschaftliche Buchgesellschaftのサイトの「Neue Medien」のコーナーでは、研究者向けに様々なCD-ROM、DVDが販売されているので、こちらもご参照頂きたい。

<http://www.wbg-darmstadt.de/>

### 3. オンライン書店

ドイツ語の新刊書のオンライン書店としては、やはりamazon.deが代表的であろうが、問題は古書である。恥ずかしながら、筆者はこれまでインターネットを通じて日本語以外の古書を購入したことがなく、ドイツ語圏のオンライン古書店については全く不案内である。その点を断った上で、筆者の知るドイツ語圏の大規模な古書検索サイトとして以下の四つを挙げておく。

<http://www.eurobuch.com/>

<http://www.zvab.com/>

<http://www.abebooks.de/>

<http://www.booklooker.de/>

在庫品と特価版を専門とする書店として以下のものを挙げておく。

<http://www.jokers.de/>

おわりに

フライブルク大学図書館が哲学専攻の学生のために電子情報の利用のてびきをまとめているので、ご参照頂きたい（pdfファイルとしてダウンロードできる）。

<http://www.freidok.uni-freiburg.de/volltexte/44/>

また、明治大学助教授のミハヤエル・マンデルアルツ氏（Prof. Dr. Michael Mandelartz）が、インターネットでの文献検索のための詳細なリンク集“Recherche“を公開されており、筆者も参考にさせて頂いた。

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~mmandel/recherche/>

本稿の最初でも述べたように、今回の報告は筆者の試行錯誤の中間報告といった性質のものである。18世紀学会員の中には、私よりもはるかにドイツ語圏の学術情報の収集に精通しておられる方が多くいらっしゃるに違いない。大方のご叱正をお願いする次第である。訂正すべき点や今後新たに得た情報については、また何らかの機会に報告できればと考えている。

## 事務局より

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願いたします。

### 新入会員

赤塚健太郎	テーマ	バロック期の音楽及び舞踏
井柳美紀	テーマ	18世紀フランス政治思想
大庭朋子	テーマ	ウィリアム・ホガースの銅版画
大橋完太郎	テーマ	18世紀フランスにおける中国をめぐる哲学的言説について
金沢文緒	テーマ	18世紀イタリア風景画研究、ベルナルド・ベロット研究
木村覚	テーマ	カント美学並びにダンス美学
小林亜起子	テーマ	18世紀フランス絵画
角田俊男	テーマ	啓蒙思想と帝国
真下恭子	テーマ	英国美術アカデミー研究
増田都希	テーマ	18世紀フランスにおける礼儀作法

### 退会者

杉野薫      鈴木康司      山科高康

新幹事会メンバー：青木孝夫、安藤隆穂、安西信一（常任幹事・年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、木村三郎（常任幹事）、小穴晶子（常任幹事）、高橋博巳、寺田元一（国際幹事）、長尾伸一、馬場朗（常任幹事）、堀田誠三、増田真、森村敏己（常任幹事）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第49号 2005年8月発行  
発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久  
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室  
e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp  
fax: 03-5841-8958  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>